

権力を持たない者は空間をもつことができる

前号のカレ・ラースン(69)に対するインタビューを目にしなが、40数年前の〈権力を持たない者は空間をもつことができる〉というスローガンが繰り返し頭の中で鳴り響いていた。大学闘争の〈占拠〉の思想～行動のテーゼはこの言葉に尽きるだろう。以下に掲載する文章は『情況 臨時増刊』(1969年3月)収録分に基づいているが、実際はそれが『存在と言語—「存在すること」は占拠をめざす』第2巻(この本については当瓦版発行所に連絡してください)に再録されたものからさらに、縦書きを横書きに改変などしてここに定着させたものである。報告されているように、〈権力を持たない者は空間をもつことができる〉というテーゼと同時に〈権力を持たない者は情報をもつことができる〉というテーゼも打ち出されていることに注目してほしい。尚、一号には収まらないので、次号に跨って〈権力を持たない者は表現することができる〉の表題で掲載する。

ここに掲載する神戸大の松下昇氏と同大理学部学生有志のシンポジウムは2月12日、神戸大理学部においておこなわれたものを、編集部がまとめたものである。

神戸大では、ここ三年間、寮問題をめぐって、寮自治会を中心に闘いが進められていたが、昨年末の寮自治会による本部＝学生部封鎖によって闘争は拡大し、寮問題を中心にする教養学部のストライキを生み出した。また、これに呼応するようにして工学部の4者協議を学部の最高決定機関とすることを要求する闘争、教育の学部長選問題など諸学内闘争が闘われ、神大闘争として展開されている。

去る2月3日には、教養部代議員大会が開かれ、「スト強化案」が可決され、問題は寮闘争から発展し、実質的には、教授会、評議会の議事録公開から教授会、評議員会の解体にまで突き進む方向で運動が進んでいる。

別掲の松下昇教官の「情況への発言」は、こういった情勢の中で出されたものである。

なお、本文中にあるように、教養学部は全学封鎖中であり、松下昇氏は「発言」にもあるように、ストライキに突入している。また同氏は関西学院大にも非常勤講師として勤めていたが、機動隊導入に抗議して、卒試業務拒否等をも含むストライキを行っている。

このシンポジウムで大学闘争の中での知識人のあり方を松下氏は本質的に提出しており、個別神大闘争の報告としてだけではなく大学闘争を闘うための資料として読んでいただきたい。(編集部)

情況への発言

〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ 二月一日の団交は評議会が〈寮問題〉に関する解決能力を持っていないことを暴露した。

しかし、これだけをスト続行か中止かの基準にしてはならない。まして〈時間〉が切迫しているからといって、〈しけん〉のための秩序に復帰してはならない。

〈スト〉に入る契機自体よりも、一ヶ月以上にわたるスト持続によって、一切の大学構成員と機構の真の姿がみえはじめ、同時に、自己と、その存在基盤を変革する可能性がうまれていることの方が、はるかに重大なのだ。

〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現せよ。

少なくとも、この実現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、〈私〉は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働(授業、しけん等)を放棄する。

この問題提起に何らかの共有性を発見する諸君は、自己にとって最も必然的な方向を創り出して闘争に参加せよ。

一九六九年 二月二日

〈六甲空間〉にて

松下昇(教養部教官)

学生の問題という、いわば事実性をめぐって出発した神大の闘争は、大学側のその問題に対する処理のしかたの問題に発展してきている。つまり学生が「評議会のテープ公開」「教授会の議事録の公開」を要求していることは、問題が、たんなる事実性をめぐる要求から、表現の私有に対する闘争に発展したことを意味している。私は、この問題を表現の問題としてとらえてみたい。

教授会、評議会の主張は、テープ・議事録を公開すれば、発言の自由・思想の自由が犯されるということにある。が、そのことをもっと本源的に考えてみれば、逆にいうと「公開して困る」というような利害関係が大学内に存在しているということになる。今まで、大学は、共同理念によって支えられた共同体であるとされていたが、このことは、大学内に敵対関係が存在することを明示しているといえよう。

2

私が、「表現が問題である」と主張するのは、一見、形而上学的にみえるかも知れない。しかし、体制の変革ということは、表現の変革と機構の変革を同時的に行なうものである。つまり、「テープの公開の要求」は、それを支える機構の解体の要求の一步である。私は、単に、物理的手段によって体制に立ち向かうのではなく、意識の変革、表現の変革を含んで闘争は進まねばならないと思っている。

神大の場合でいうと、表現の変革と体制の変革を媒介するものがストライキである。というのは、通常の労働者のストは、取り引きを目的とするものであった。有限のものを対象として行なわれてきた。しかし、神大の現在のストは自己の存在形態を否認するためのストライキとなっている。

このようなストライキに対して教官の認識はあいまいである。このような根源的ストに対しては、教官が、教官として良心的に振まおうとすればするほど、教官は管理者にならざるを得ない。つまり、学生の要求を体制に巻きこむことになってしまう。

3

私は、一枚の紙キレを貼り出した。それによって、マスコミ・教授会は大騒ぎとなっている。これは腐敗である。誰れかがやらなければならないことを私がただけであり、状況がそうさせたに過ぎない。だから、私個人が書いたということは忘れて欲しい。

神大教養で行なわれ始めたように、現在は、一人一人が自分の言葉で発言すべきときである。あくまで個人の立場で、全責任を負ったビラを自分一人でまく、そういう態度が要求されている。

4

封鎖がある程度進歩的といわれていた教養部教授会に向けられているということは重要なことだと思う。つまり、彼らは、彼らが良心的になればなるほど、自己の階級性を隠蔽することになり、右から闘争を支えることになるという自己分裂に気づいていないのである。

私はそういう立場を捨てて、大学内の一個の人間として、この問題にとり組むことを決意した。しかし、私は、辞表は提出しない。そうすることは、私の身柄をあずけることであり、自分を処分して下さいというに等しい。大学が国家公務員法違反とかなにかで、処分をするならば、そのことは、大学が自からの階級性を暴露したことになる。私は、それに対しても闘うつもりである。

したがって、私は、教授会にも出席するつもりはないが、有志教官には呼びかける。現在、教養部教授会は、教授会も開けず転々としているが、その中には心情的には私の主張を理解する人もいる。私のレッド・ページには反対するといっている人もいる。

5

なぜ、もっとも進歩的な教養部で封鎖が行なわれているかということ、教官たちは理解する必要がある。管理者としての矛盾をかくしたまま、学生の要求を汲んだりしてはいけないのである。教養部研究室のバリケードは「教官たちよ、すべての地位をすてて、丸裸になれ」という情念を含んでいるのである。だが、教官たちは、自己の分裂に無自覚に、この問題を論じようとしている。

私は、封鎖・バリケードは、表現形態としてみなければならぬと思う。権力を持たない人間は空間を持つことができるのである。物理的にも、意識的にもそうである。道ばたで、野原で、対等の人間として話し合おうとすることに秩序は反発するのである。

こういった秩序の反発は、大学の自治は特権的であり、学問は私有財産制度に基いたものであることを暴露している。